

日本の歴史 21

『スイスと日本：日本におけるスイス受容の諸相』 森田安一編（刀水書房 2004年）

本書の請求記号 319.10345-Suis

稲垣 宏行

スイスと日本の関係は、文久四（1864）年の和親通商条約締結の頃から始まりました。本書ではそれ以前の文久元（1861）年頃すでにその政治制度が紹介されたことを皮切りに、日本でスイスの理念や文化がどのように取り込まれて来たかを説明しています。

スイスは条約締結の頃からすでに、永世中立国として他国の侵略を考えず小国主義を貫く理想的な国家像であると日本の一部の学者は考えていたようです。ところが、日本ではスイスと交流が活発になった明治期から1945年の敗戦に至るまで、スイスの国家像についての研究が活発にされておらず、また理解もそれほど深くなかったようです。太平洋戦争後、日本を占領していたマッカーサー元帥も、スイスの国家像を理想としていたらしく、日本をスイスのような「非武装中立国」にしたいと考えていたようです。しかし、それも理解不足から来る誤りで、スイスは永世中立を維持するために軍事国家と言われるほどの軍備を整えた国だと書かれています。

本書ではさらに、スイスと日本の関係を前述のような国家体制からだけでなく、宗教、経済、教育、文学の四つの分野からも説明しています。

宗教面では、キリスト教を日本に伝えたスイス人とこの宗教が日本に及ぼした影響について論じられています。代表的人物として、明治十八（1885）年から独逸学協会学校で教鞭をとったプロテスタント宣教師のシュピナーが挙げられています。彼は「自由神学」の旗手として評価されています。また、自由民権運動の推進者である片岡健吉、板垣退助らの思想の根底にもキリストの教えがあり、スイスの民主主義の理念と交わる部分があったと本書では考えられています。しかし一方では、スイス人神学者ブルナーは、日本にスイスのような民主主義の精神が根付かないのはキリスト教化の度合いが低いからとも述べています。

経済面では、この国が『アルプスの少女ハイ

ジ』に象徴されるように、農林畜産業と鉄道業が主流であり豊かとは言えず、牧歌的な国家だという先入観を指摘しています。この点について本書は、20世紀頃から銀行業や時計工業が産業の主流を占めていることや経済体制と労働環境も決して悪くないなどを挙げています。

教育面では、日本で少なからぬ影響力を持ったスイスの教育者ペスタロッチの理念が、長田新や福島政雄らのペスタロッチ運動（1920-1945）を引き起こしたこと、日本の教科書におけるスイスの描写について述べています。この教科書の記述やペスタロッチの理念については、理解の浅さや先入観から日本では革新的側面ばかりを強調している点が問題視されています。

文学面では、理想的国家としてのスイスを題材にした片沢光治良の短篇小説『ブルジョワ』や武者小路実篤の『ルツェルン』が代表的なものとして取りあげられています。また、鷹羽狩行、江國滋によって手がけられたスイス旅行を題材にした俳句も一部紹介されています。しかし、スイスは様々な言語圏から成る連邦国家です。そのせいか、スイス出身の著名な文学者や思想家が登場しても、スイスとしての色合いが出にくいことも多々あるようです。

スイス文学は近年まで広義のドイツ文学として捉えられていたと本書も述べていますが、スイスが理想的国家として考えられている一方、その詳細な国家像が日本人の中で今ひとつ定着せず、加えて誤った情報が飛び交うのは、著者も言うように、複数の言語圏から成る国家体制も関係しているのではないのでしょうか。

明治以前から日本と交流がありながら、長らく理解されなかった面も多いスイス。本書は、読者に正しいスイス像を提供できるよう、その手助けをしています。

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）

永世中立国スイスの実像に迫る